

加温栽培ピーマンの肥料吸収について

高橋英生・野間 史・岡迫義考・吉原安行

(宮崎県総合農業試験場)

TAKAHASHI, H., NOMA, F., OKASAKO, Y. and YOSHIHARA, Y.

On the Absorption of Nutrient Elements by Piment in the Green-house Culture.

加温栽培ピーマンの肥料吸収量をあきらかにし、施肥基準設定の資料を得るため、第1表に示す各区を設け肥料吸収量を調査した。

I. 試験方法

品種は「さきがけみどり」、は種8月25日、定植11月1日、栽植密度は180cm×55cm(a当たり100株)とした。栽培は温室内でおこない最低気温20℃を目標に加温した。

第1表 各区の施肥量

区	施肥量 (kg/a)			
	N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥
無肥料区	0	0	0	500
少肥区	2.0	1.5	2.0	〃
中肥区	4.0	3.0	4.0	〃
多肥区	6.0	4.5	6.0	〃

基肥と追肥の割合は4:6とし基肥は全層に混合し、追肥は3等分して、12月15日、2月15日、4月15日にうね上全面にまいてかん水した。果は20gを目標に収穫し、植物体および土壌の分析は40日ごとにおこなった。

II. 結果および考察

ピーマンの生育は順調に経過し、病害の発生その他の障害は全くみられなかった。

(1) 11月~2月の生育は、無肥料区を除いて各区間の差は小さかったが、葉の大きさは少肥区、中肥区、多肥区の順であり、葉色は多肥の区ほど濃緑であった。3月以後は多肥の区ほど生育がおう盛であり、少肥区では5月中旬から、中肥区も6月上旬から肥料不足が観察された。

(2) 乾物中の成分濃度に対する施肥量の影響は少なく、各成分の吸収量は、茎葉および果実の乾物収量に比例し、多肥の区ほど多かった。

(3) 6月末までのピーマンの収量は第2表に示す

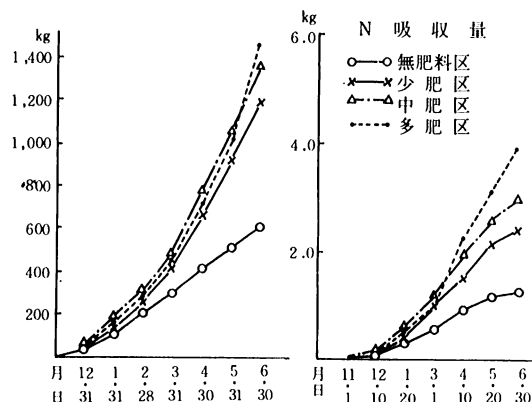
とおりであり、多肥の区ほど多収であったが、肥料の吸収増に比べるとはるかに少なく、窒素についてみると、多肥区は中肥区に比べ約40%の吸収増にかかわらず、収量は5.7%の増加にすぎなかった。しかし、栽培期間がさらに長くなるにつれて、肥料吸収の増加は、増収と結びつくものと考えられる。

第2表 収量 (kg/a)

区別	全収量			上物率 (%)
	果数	重量	比率	
無肥料区	33,200	606.7	44.2	99.0
少肥区	60,350	1200.8	87.4	98.5
中肥区	66,880	1372.6	100	98.9
多肥区	73,300	1450.7	105.7	98.7

第3表 肥料吸収量 (kg/a)

区別	N	P ₂ O ₅	K ₂ O	CaO	MgO
無肥料区	1.35	0.43	2.69	1.26	0.28
少肥区	2.43	0.85	5.30	1.97	0.51
中肥区	2.84	0.98	5.92	2.44	0.64
多肥区	3.99	1.21	7.46	2.81	0.81



第1図 月別累計収量とNの吸収量(kg/a)